

千年前に彫り出されたさらしなの仏様

ケヤキの一木造り、3メートルの十一面観音



大御堂での法要では、「大般若経」というお経を、アコーディオンのようにパラパラと広げてめくって読誦したことをする転読もありました



長野県千曲市の智識寺で春祭り

長野県千曲市上山田の八坂地区に、千年前の平安時代、ケヤキの幹から彫り出された3メートルの仏様があります。十一面観音菩薩です。智識寺というお寺に隣接する、茅ぶきの大御堂と呼ばれる建物の中に鎮座しています。十一面観音と大御堂はともに国の重要文化財です。十一面観音は毎年4月17日の春祭り、厨子の扉を開けて御開帳されます。小学校の時から、四十数年ぶりにお参りしました。

四十数年ぶりのお参りのきっかけは、この仏様が冠着山への信仰との関連で造られたことを知ったことです。上山田も旧更級郡。冠着山のふもとの、さらしなの里の仏様としても一度見たいと思いました。もう一度とは言っても、小学生のときは先生から十一の観音様がそれぞれ苦しみから救ってくれるというようなことを聞いたのが記憶に残っているだけで、姿形は覚えていませんでした。護持会のお許しをいただき、間近で写真も撮りました。すごい。見慣れた仏様の姿とは全く違います。素朴だけれど優美な立ち姿。細く長い腕、しなやかな指先。一本の木を彫り抜く一木造りならではの造形かもしれません。大きいので、厨子は板敷を抜いて土間に届いています。足元もきれいです。肝心のお顔は高すぎたものが右上です。年輪がしわにも見え、千年の年月を感じさせます。目の辺りから下りる白い筋は、苦しみに寄り添い一緒に泣いてくれたからでしょう。頭には、親しみが持てる観音様のお顔がいくつも見えます。

上山田の歴史に詳しい宮原英夫さんによると、この仏様ができたときとの記録はないそうですが、もともとはもつと上の冠着山の頂上に近い所があり、だんだんと下り、戦国時代には現在の所に移りました。隣接する智識寺は、大御堂をお守りするお寺だそうです。上山田では昔から村を挙げて一年間の豊作や商売繁盛、家庭円満を願い、春祭りをここで営んできました。屋台

もいっぱい出てそれはにぎやかだったそうです。檀家をたくさん持つお寺ではないので運営が大変ですが、本来智識とは、仏教の信者が寺や仏像の建立や維持のために金品などを寄進する意味だそうで、護持会によってまさしくそうした形で維持されています。



地元の方が作った大わらじも大御堂（奥）に奉納されました